

先代の生き様を映す踊屋台 職人魂と復興の祈りを込めて修復

踊屋台の修復作業を担ったのは、福島市内の工匠店「八木沢」です。七代目社長、八木澤純子さんは「50年前に曾祖父、祖父、父と三代で関わった踊屋台に聞かれる私は幸せ者です」と話します。八木澤さんが踊屋台を初めて見たのは、今から9年前。「子どもの頃から父に『すごいのがあるんだ』と聞かされていた私にとっては伝説の屋台でした。大店の旦那衆から福島一の屋台にしてほしいとお願いされて設計図より大きい屋台にしたことや、ほぼケヤキを使い、曲りや反りをなくするために苦労した事。また、曾祖父が描いた虎

や龍の下絵があまりに見事で彫刻の発注先から戻ってこなかった事など、一目見て父から聞かされていた全ての事が腑に落ちました」。踊屋台は、日本の高度成長を背景に、木材選びの目利きと匠の技、そして大店の旦那さまたちと巡り合ったご縁があつて生まれたものだったのです。

目指したのは50年の時を経た今の雰囲気壊さない修復

修復は、昨年9月から始まりました。完成後50年以上も経過しており巡行できるように修復する作業は大変でした。車輪が傷んでいたら動かさないで修理はできないと思つていたそうですが杞憂でした。「作業を始める前に私たちがイメージしたのは、完成から50年の時を経た今の雰囲気を壊さないような修復でした。細部まで手を掛けてしまうと、時の移ろいが分からなくなってしまうのでしよう」。一番手が掛かったのがケレ



工匠店「八木沢」社長 八木澤 純子さん

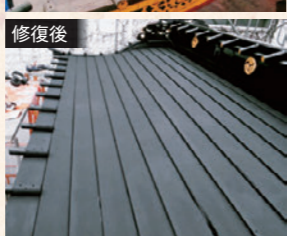
修復は、昨年9月から始まりました。完成後50年以上も経過しており巡行できるように修復する作業は大変でした。車輪が傷んでいたら動かさないで修理はできないと思つていたそうですが杞憂でした。「作業を始める前に私たちがイメージしたのは、完成から50年の時を経た今の雰囲気を壊さないような修復でした。細部まで手を掛けてしまうと、時の移ろいが分からなくなってしまうのでしよう」。一番手が掛かったのがケレ



踊屋台を作成する八木澤規矩夫さん



鳳凰と龍
▲踊屋台に使われている彫り物の下絵は、全て故・八木澤代作さんの手によるもの。唐破風の前後には、鳳凰と龍



▲屋台に使われている「赤」は、御霊を払うための色。決して派手に仕上げるために用いた色ではない

- ※1 ケレン作業：剥れかかった塗膜や付着物の除去、錆落としなどの作業のこと。下地調整処理。
- ※2 カシュー…漆に似た、樹脂系の塗料。



踊屋台を通し楽しい思い出を
多くの子どもたちにも届けたい

祭り本来の意味や魅力を伝えようと記念講演も開催

さらに伝承会では、祭りの意味や魅力を伝える役目も担おうと記念巡行に先駆け記念講演も開催。講師の懸田弘訓さん（福島市文化財保護審議会会長）が語る祭りの起源、子どもが屋台で踊る意味は、実に興味深いものでした。屋台の飾り物の一つ山鉦は、亡くなった方々の御霊の依り代。囃子をにぎやかにするほど御霊が依り付くと考えられていたのだそう。「慰めて鎮めて帰っていたのだき平癒を祈るのが祭りの原点。その昔、7歳までは神の子と言われていた子どもも依り代でした。舞うことで御霊を鎮め平癒を祈るのが踊屋台だったんですね」という懸田さんの講演に、高倉さんをはじめ伝承会の皆さんも、あらためて踊屋台について理解を深めたそうです。

求む祭り好き！ オール福島で継承

伝承会では、未来を担う子ども達に活用してもらい、街の活性化につなげていきたいと願っています。「自分の町に誇れるものがあり、そ

れにまつわる思い出がたくさんあれば、市外に出たとしても折りに触れて帰ってこられます」と高倉さん。踊屋台は、伝承会が管理するのでオール福島で聞かれます。「地縁、血縁不問。祭り好きが集まって一緒に取り組むところが魅力です。記念巡行の時も約100人の子どもたちが引く踊屋台は元気な掛け声と笑顔であふれ、見守る沿道の皆さんも笑顔で応援していました。これこそ踊屋台が持っている力ですね」とさらに高倉さんは話してくれました。たくさんの方の奇跡を集めて受け継がれる踊屋台には力が宿ります。そのパワーが復興への力になります。



▲引き手は公募で集まった児童約100人

福島踊屋台伝承館（保管庫）を建設中です。協賛をいただける方は、こちらまでご連絡ください。
問/NPO法人福島踊屋台伝承会（福島市観光開発株式会社内）
024-521-2552

※1 御霊……この場合、怨みなど心残りがある霊。諸悪（災害や疫病など）の根源とされていた。
※2 依り代…神霊が依り憑く対象物。